

2020年 5月31日礼拝式次第

日本基督教団半田教会
横山良樹牧師

招詞 : 詩 124 篇 8 節

わたしたちの助けは天地を創られた主の御名にある

讚美歌 : 21-18 番 (心を高く上げよ) より 1 番のみ

心を高く上げよ。主のみ声に従い、
ただ主のみを見上げて 心を高く上げよ。

詩篇交読 99 篇

祈 禱

すべてのものを造り、歴史を支配される全能の父なる神様。今朝も、あなたの御前に集い、あなたの御業を賛美し、わたしたちがあなたの民とされていることを喜び祝う時を与えてくださいましたことを心から感謝いたします。今朝は、ペンテコステ、聖霊降臨日です。主は復活されてのち 40 日を弟子たちと親しく過ごされ、その後、天に昇られました。そのとき、上よりの力に覆われるまでエルサレムにとどまっていなさいと約束の言葉を残し、彼らを祝福されました。それから 10 日後に約束の聖霊が降り、弟子たちはあなたの弟子として、各地につかわされてゆく主の御業のためにはたらく使徒としてあたらしく立てられる存在とされました。その働きは世界に及び、今もなお、この場で、わたしたちがあなたを賛美しておりますように、あらゆる地域、あらゆる民族に及び、主の民を聖霊の働きにおいてひとつにしています。感謝します。主よ、どうか、あなたの御心を知って、わたしたちを作り替えてください。あなたが、わたしたちひとりひとりを捉え、始めておられる御業があなたの望むところにしたがって完成へといたりますように。わたしたちを信仰に始まり、信仰へと至らせる歩みへと聖霊によって導いてください。世界はこの数か月、コロナウィルス感染症による試練に見舞われ、あらためて、わたしたち人間は、自立も、自足もできない存在であることを思い知らされています。どうか政治経済、各分野のかじ取りをする者たちが、あなたによって謙虚な心を与えられ、砕かれて、あなたとともに生きる柔ら

かな心を与えてくださいますように。聖霊のかぜによって、あしきものを吹き払い、あなたの御業をはじめてくださいますように。わたしたちの助けは天地を創られた主の御名にあるとの真実を、どうか、わたしたちがそれぞれの持ち場で生きることが出来るように、主の民をつよめてください。今から、御言葉に聴きます。ひとりひとりの課題に、あなたが触れて下さり、示しを与えてくださいますように、この日、世界で持たれるすべての礼拝において、生けるあなたの御名があがめられますように。この祈り、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン

聖書朗読：テサロニケの信徒への手紙 1 2章 1～4節

兄弟たち、あなたがた自身が知っているように、わたしたちがそちらに行ったことは無駄ではありませんでした。無駄ではなかったどころか、知っての通り、わたしたちは以前、フィリピで苦しめられ、辱められたけれども、わたしたちの神に勇気づけられ、激しい苦闘のなかで、あなたがたに福音を語ったのでした。わたしたちの宣教は、迷いや不純な動機に基づくものでも、また、ごまかしによるものでもありません。わたしたちは神に認められ、福音を委ねられているからこそ、このように語っています。人に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を吟味される神に喜んでいただくためです。

讚美歌：21-343番「聖霊よ 降りて」（1番）

聖霊よ降りて むかしのごとく くすしき御業を
あらわしたまえ 世世にいます 霊なる神よ
来たりてこの身に 満ちさせたまえ

説教：「神に喜んでいただくために」

聖霊降臨日を迎えました。主の復活から 50 日目。この日、イエスさまが約束しておられた聖霊が降り、一人一人の上に留まると、彼らはあらゆる国々の言葉で神の御業を賛美し始めた、と使徒言行録に記されています。

この聖霊降臨日は「教会の誕生日」ともいわれます。いつもなら東側の壁にラミネートのろうそくを 50 本たてた教会学校生徒のおおきなケーキ、誕生ケーキのつもりなのですが、そういう模造紙が張り出してありました。覚えておられる方もお出でになるとと思います。イースターの翌週から毎週、子どもたちが蠟燭を貼って行って、今日、一番大きい蠟燭をケーキのてっぺんにたてるのがお約束でした。教会の誕生を祝うケーキです。使徒言行録には「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また地の果てに至るまで、わたしの証人となる」という主イエスの約束と祝福の言葉が記されています。

実際、使徒言行録は、この聖霊を受けた使徒たちによる、エルサレムから地中海沿岸をへて小アジアへ、さらに海峡を渡ってギリシアへ、そこからついにローマに至る福音伝道の歩みを記したものです。主イエス・キリストの証人とされた者たちが遣わされて働いた記録、聖霊によって働いた記録ですので「聖霊行伝」という呼び方をされることもありました。福音の伝達はたんなる「言葉」だけではなく、その言葉を取り次ぐ者の中にある「強い確信」が必要です。先週、「カメハニンジンヲアイシタモウ」という宣教師の言葉を聴いて人々が信じたという、明治時代の瀬戸の伝道の話を紹介しましたが、パウロがこの手紙で伝えたように、言葉を証する「聖霊」による力と、語る者を導き、そこまで懸命にさせる「強い確信」が見えた時に、人々はそこにはたらく主の御臨在を見たのです。そこに、神に召し集められた者たちによる教会が誕生していったのです。こうして働く聖霊は、新約聖書ではイエスさまから「弁護者」という説明が与えられています。ギリシア語で「パラクレートス」という言葉ですが、これは「かたわらに・となりに」を意味する前置詞「パラ」と「呼ぶ・招く」を意味する「クレオー」という動詞の合成語で、「かたわらに立つ者」を意味し、そこから弁護者、助け主と訳されます。この言葉と同じ系統の「パラクレシス」が 2 章 3 節に使われています。パウロが「わたしたちの宣教は、迷いや不純な動機やごまかしにもとづくものではありません」と語った箇所。「宣教」と新共同訳聖書は訳しましたが、これが「パラクレシス」で「慰め、励ましの言葉、教え、勧め」を意味する言葉です。つまり、聖霊の働きによってテサロニケに遣わされたパウロたちは、文字通り、町の人々の傍らに立って、慰め、励ましの言葉を語った。存在をもって示し続けた。それはあなたがたのために救い主がお生まれになり、十字架にかかれ、

そして復活なさって死を滅ぼし、わたしたちに、神の子として生きる新しい命の道をお示しになった。あなたは神に愛された者として生きることが許されている。あなたの罪は赦されたという消息によって生き、天地万物を創造された方を父と仰ぎ、同じように召された者たちとともに、この教えに生きる群れを形作ってゆくよう招かれている。そのように委ねられている福音を宣べ伝えた。すなわち宣教ですね。この福音に従って生き方を変えてゆくことは、彼らの生きている社会・世間に対する大きな挑戦でした。それは、彼らが生きて、所属していた集団からの離脱、新しい価値観による生き方の変化を意味しましたから、摩擦を生じないではおかなかったからです。実際、パウロたちはゆく先々で迫害を受けています。テサロニケにくる直前に伝道したフィリピにおいてパウロたちは「苦しめられ、辱められたけれども」と激しい伝道の戦いがあったことが書かれています。使徒言行録の記事によれば、このとき牢屋に入れられたり、鞭打たれたりという目にあっています。

テサロニケはヨーロッパ二番目の伝道地でした。フィリピからローマに向かう街道筋を西に 100 キロほど進んだ港町、マケドニア州の都でもあった大きな町です。ちょうど名古屋から京都が直線距離で 104 キロですから、フィリピを名古屋とすれば、京都の位置にあるのがテサロニケということになります。そもそも福音がアジアからヨーロッパに渡ったのは「マケドニアの祈り」として有名な、夢のお告げをパウロが受けたことで、それを聖霊の与えるビジョンと受け取ったパウロが、この神さまの示して下さった将来計画にかけて、海を渡ったことによります。聖霊によるナビゲーションは最終的に世界帝国の首都ローマに向かいますが、それは宣べ伝える者にとっても、受け入れる者にとっても激しい戦いをもたらさずにはおかないものでした。この手紙の 1 章でも、パウロはテサロニケの人々がひどい苦難のなかにあっても聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れたと記しています。それはわたしたちの傍らに立たれるパラクレートスとしての聖霊の働きによって支えられ、心が燃えるような体験、人知を超えた平安に支配される体験を味わったことでした。そして 2 章に入るとパウロは、この福音との出会いの体験を、今度は宣べ伝えたパウロたちの側から語って見せます。「あなたがた自身が知っているように」(1 節)、「知ってのとおりに」(2 節)、と、パウロ・シルワノ・テモテと、テサロニケの人々との出会い・交流を思い起こさせながら、彼らの今の恵みを明らかにします。到着した時はどうであったか、それからパウロたちはどのように働いたか、

激しい苦闘のなかであなたがたに神の福音を語ったときの様子を思い起こさせています。それは初めの恵みに立ち帰り、ともに感謝をささげるためです。このパウロたちの伝道にかける勇気の源は、ただただ「神に認められ、福音を委ねられているからこそ」です。彼らには人間と人間の社会を一変させることのできる福音が委ねられている。だから人に喜ばれるためではなく、人の心を吟味する神に喜んでいただくためにこそ懸命であった。そう動機を明らかにしています。ここは大切なポイントですね。

先日、といっても3月半ばのことですが、去年5月に行われた第69回中部教区定期総会の議事録が送られてきました。自分が議長の時のもので、パラっと議場での質疑や、答弁などを読み返したのですが、そこに今日の最後の個所につながる答弁がありました。議長報告で教区の役員研修についてふれた報告のなかに「学ばない教会は世と同じ形を取るようになる」と書いたのですが、この意味が理解できないので説明してほしいという質問があったのです。それで、ローマの信徒への手紙の中に「あなたがたはこの世にならってはなりません。むしろ、心を新たにしてお自分を改めて頂き、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるか、弁えるようになりなさい」(12:2)という御言葉があります。ここで「この世に倣う」という言葉は、「シン・スケーマ」というギリシア語、直訳すると「同じ」を意味する「シンパシー」の「シン」と、「かたち」を意味する「スケーマ」の合成語で「同じかたち」となることが「倣う」の意味だと説明し、キリスト者は礼拝を中心として、聖書の御言葉を中心として整えられないと、世と同じかたちを取ってしまう。聖書の教える価値観、神の喜ばれるところではなく、教会の筋道から逸れて、世の中の筋道や、マスコミの言うところなどに絡めとられてしまう。だから、わたしたちの依って立つところは何処か、基本は何かを常に聖書を通して確認してゆくということが大切です、という意味のことを語りました。どうも質問した人は、世の中を馬鹿にしているのではないかと思っておられたようですが、そうではない。ここでパウロが言っているように、わたしたちは人の目や、人に気に入られるためにではなく、人の心を吟味される神に喜んでいただくために生きるのだという弁えを持つことが大切なのです。そのとき、わたしたちはパウロたちのように、福音を生きる者とされ、地の塩、世の光として用いて頂けるのです。これこそが聖霊によって用いられるわたしたちの伝道の筋道です。悩める人々の傍らに立つわたしたちの慰めと励ましのかたちなのです。聖霊降臨日の本日、わたしたちに、

主が託して下さっているこの尊い務めについて思いを新たにしたいと願います。

お祈りいたします。

神さま、暗い夜の間も守られ、新しい朝、新しい命に生かしていただき、感謝をいたします。どうか聖霊の息吹によって、わたしたちにまとわりつく闇の残りかすを吹き払ってください。いつも世と同じ形を取らせようとする、同調させようとする世の力から解き放ってください。この世が宣伝する者ではなく、福音が宣教する慰めと励ましの希望、あなたがわたしたちにくださった希望、主イエス・キリストに委ねて生きる平安をお与えください。そのことによって、あなたが今も生きて働く主であることを証する群れとして生かしてください。この願いと感謝、わたしたちの救い主、あなたの御子イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン

讚美歌 21-461 「みめぐみゆたけき」(1番)

みめぐみゆたけき 主の手にひかれて
この世の旅路ぞ 歩むぞうれしき
たえなるみ恵み 日に日に受けつつ
みあとを行くこそ こよなきさちなれ

献 金

報 告

添付の週報をご覧ください

祈 禱

主の御名が崇められるように。コロナウィルス感染症対策下で、医療・介護・福祉に従事する方たちのために、ともに礼拝をささげる日が与えられるように。

主の祈り

天にまします我らの父よ
ねがわくば御名をあがめさせたまえ

御国を来たせたまえ
御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を 我らがゆるすごとく
我らの罪をも ゆるしたまえ
我らを試みにあわせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄とは 限りなく汝のものなればなり

アーメン

祝 禱

主イエス・キリストの恵みと、
父なる神の愛と
聖霊との親しき御交わりが
主の恵みのご支配を信じてこの世を生き抜く
あなたがた一同の上に、とこしえにあるように。

アーメン！